

玄界灘を渡って－2017年春、釜山、対馬、大宰府－

高橋 祐吉

はじめは、今回の社会科学研究所の調査には不参加のつもりだった。年老いてきて、あっちこっちと動くのが面倒になってきたこともあるし、近年企画される調査がだいぶハードなスケジュールのように見えたので、付いて行ったはいいが同行の諸氏に迷惑をかけてはまずかろうとの心配もあったからである。どうせパスポートの期限ももう既に切れているだろうと思ってもいた。ところが、一応念のために確認してみたら、有効期限は今年の9月だった。こうなると私のような年寄りも結構現金なもので、急に社研の海外旅行に出かける最後のチャンスのようにも思えてきた。村上さんの後を継いで新所長となった宮崎さんには、毎度毎度お叱りを受けている私だが、高邁な調査目的などはすっかり頭の片隅に追いやられ、旅への期待ばかりが膨らんできたのである。今回の旅が、いつのまにやら老後の愉しみのようにもなってきたのであるから、お笑い草の話ではある。

そこでさっそく参加申し込みとあいなつたわけだが、そうなると、せっかく出かけるのだからとあれこれ調べたくなってくる。この際だからお騒がせするような文章を書こうという「下心」も生まれ、そのために暇にまかせてあれこれと資料を蒐集し始めることになった。何故そんな気持ちになるのか私にはよくわからない。自己顕示欲が旺盛な目立ちたがり屋が心底嫌いなくせに、自分もまた謙虚を装った裏返しの目立ちたがり屋だからなのかもしれない。とにかく何か書きたくなってきたのである。もちろん、真面目でアカデミックな文章などはや書けはしないし、書きたくもないから、書きたいことを好き勝手に書くだけのことである。もしかすると、調査にくっついて出歩く徘徊老人や怪しげなことを書かずにはいられない瘋癲老人に、徐々に近付いてきたということなのであろうか。以下の雑文は、旅日記の体裁をとって書き記したその「下心」である。

釜山にて－朝鮮通信使のこと－

今回の旅は、玄界灘をはさんで釜山、対馬、大宰府を巡る四泊五日の行程であったが、私が最初に興味を惹かれたのは、壱岐と並んで玄界灘に浮かぶ島、対馬である。社研の調査でもなければとても足を延ばしそうな、遙か彼方の遠い場所のように思われたからである。対馬についてはのちに詳しく触れるので、話の順序としては旅程に沿ってやはり釜山から始めた方がわかりやすいだろう。旅から帰ってしばらくして知り合いと会ったら、「釜山に行っ

たらしいが、大丈夫だったか」と問われた。一瞬何のことかと思ったがすぐに気が付いた。釜山にある日本の領事館前に建てられた、慰安婦の象徴とされる少女像の設置をめぐる、それに抗議した日本が、大使と領事を一時帰国させるという事件が起こっていたからである。日韓関係がかなり険悪になっていたのも、友人はさだめし釜山の街なかは騒然としているかのよう思ったのかもしれない。

たまたま村上さんが気付いたので、移動中のバスの車中から少女像を見ることができたが、そこには誰もおらず静かなものだった。特別な日でもなければ人が集まったりすることもないのだろう。もちろんわれわれも心配するような目に遭うことなどなかった。少女像の設置も、日韓の合意から言えば大人げないのかもしれないが、わが日本は、戦時中「突撃一番」(なるほど!)と名付けられたコンドームを兵士に配って、軍が管理した慰安所に列を作らせたのであるから(それが、「聖戦」を戦った「皇軍」のもう一つの側面なのである)、韓国の人々の怒りがそう簡単に収まらないのは当然であろう。振り返ってみれば、日本政府の内閣総理大臣や大臣、国会議員たちは、韓国や中国の批判などものともせず、両国大使館からさほど離れてもいない靖国神社に毎年奉納や参拝を続けているのであるから、偉そうに抗議できる立場にあるかどうかははなはだ疑問である。

靖国神社に参拝し続けている総理大臣は、戦没者に対する慰霊であり他国にとやかく言われる筋合いはないなどと開き直っているが、靖国神社がどんな神社なのかを覆い隠したまったくの戯言というものであろう。出かけてみればすぐにわかるが、靖国神社は先の大戦を、「自存自衛」のための戦いであり(それを外国でやっているのが嗤わせるのだが)、「アジア解放」のための「正義」の戦争である(唯我独尊の極みであろう)と位置づけ、「戦犯」をも国家のために命をささげた「英霊」として祀っているような、政治色が豊か過ぎるほど豊かなとんでもない宗教施設なのである。侵略戦争に対する反省がないのは勿論だが、その結果として、戦没者に対する真摯な慰霊さえもどこかに消えてしまっている。天皇制には批判的な私であるが、直接現地に赴いて、日本軍兵士だけではなく戦いに斃れたすべての人々に深く頭を垂れる平成天皇の慰霊の旅の方が、よほど慰霊と呼ぶにふさわしいのではあるまいか。

釜山では昌原市の商工会議所や人的資源開発院の方の話を聞いたりしたが、私が興味を持ったのは、伽耶時代の高床家屋や竪穴住居がある鳳凰台、新羅時代のものではないかと推察されている古墳群がある福泉洞(入口の白壁と赤い樅の対照が目鮮やかだった)、あるいはまた朝鮮通信使歴史館の方である。古代の遺跡やその発掘に詳しい土生田さんは、鳳凰台を訪れた時から自信に溢れた名調子の解説ぶりであった。この3月に定年退職された荒木さんを、以前私は「長話の荒木」と冷やかしたことがあるが、それにならって言えば、まさに「語り部の土生田」である。そんな彼の話を興味深く聞きながら、日韓の交流をめぐる明と暗に関するわずかばかり

の知識を思い出したりした。

朝鮮通信使歴史館は予想外にシンプルな作りだったが、日韓関係が大きな軋みを見せている時であるからこそ、大事にされるべき施設のようにも思われた。歴史館で入手したパンフレットには、「約 400 年前から両国を行き来しながら誠信交隣の精神を実践していた朝鮮通信使は、今は両国を超えて世界の平和と文化交流の模範として位置付けられる日が遠くない。最近、両国の二つの民間団体が共同で『朝鮮通信使関連記録』をユネスコ世界記録（記憶）として登録を申し込み、その価値を高める広報事業をユネスコ本部があるフランスのパリで行ったためである」（釜山大の韓泰文）、あるいは、「今日の韓日両国に求められているのは互いの異なる点を浮き彫りにしながら不信感を増幅させることではなく、両国が共有する質の高い共通点を前面に掲げることで協力と友好を増進させていくことである」（東西大の張濟國）といったメッセージが寄せられていた。

コリア語の非常勤講師で、今回の旅程に関して事前にレクチャーもしてくれた魏（ウィ）さん（釜山と対馬に同行してくれた彼は、通訳も、ガイドも、そしてその他もろもろの雑用もじつに手際よくこなしてくれた）から教えてもらうまで、私は、両国の民間団体が共同で「朝鮮通信使関連記録」をユネスコの「世界の記憶」に登録しようとしていることなど、まったく知らなかった。朝鮮通信使の話なども、歴史の一齣ぐらいにしか思っていなかったが、先のような現代的な意味を付与されて蘇ってきているのである。そう言えば、対馬の市役所にも「朝鮮通信使をユネスコ記憶遺産に登録しよう」と書かれた垂れ幕が掛かっていた。「誠信交隣」という朝鮮通信使の精神を復興させることは、両国にとって意義深い試みと言えるのではあるまいか。

「誠信交隣」とは雨森芳洲の言葉である。彼は対馬藩において朝鮮外交の第一線で活躍した人物で、その深い学識や優れた外交手腕から、朝鮮通信使の一行にもきわめて高く評価されていたらしい。朝鮮通信使については、仲尾宏『朝鮮通信使』（岩波新書、2007 年）をはじめ日朝関係を論じた数多くの文献に登場するので、詳しい話はすべてそれらに譲ることにして、些事に過ぎないことについてだけ、一言触れておきたい。一行は、正使、副使、従事官の三使を筆頭とした 400 名前後からなる大使節団であり、1607 年に往来した第一回目の通信使の正使は、その名を呂祐吉（リョ・ウギル）という。

彼の名前を関連図書で見えてはじめて気が付いたのであるが、なんと私と同じ名前ではないか。彼の名前は、森鷗外の小品である「佐橋甚五郎」にも登場する。作品では、呂祐吉（「りょ ゆうきつ」とルビがふられている）が江戸からの帰りに、駿府に隠居していた家康に会うところから話が始まる。ところで、これまたどうでもいいことだが、私の名は父ではなく母がつけた。国文学者で『万葉集』や『古事記』の研究者で知られた武田祐吉からとったとのことだったので、国文学を学んで古典が好きだった母は、きっと彼のことを敬愛していたのであろう。この人物

のいい加減さについてはのちに触れるが、それはともかく、呂祐吉の存在を知ってからこれまで以上に日朝関係史に興味がわくようになり、朝鮮が日本を映す鏡のようにも思えてきた。そんなこともあって、最近刊行された関周一編『日朝関係史』（吉川弘文館、2017年）などもパラパラめくってみた。単純といえばあまりにも単純な話なのではあるが…。

対馬にて（1）－宮本常一と対馬－

対馬は、朝鮮半島に最も近い日本であり、日本と韓国はよく「一衣帯水」の関係だと評される。わずか50kmほどしか離れていないのだからほんとうに近い。われわれは3月16日の昼に釜山港を発って、ジェットフェリーで対馬の比田勝港に向かった。玄海灘は荒れると聞いていたが、至極穏やかで快適な船旅だったので、くつろいでいるうちにあっけなく対馬に到着した。その後、鱒浦にある韓国を遠望することができるという韓国展望所に出かけたが、あいにくの花曇りで韓国は望めなかった。魏さんによると、「日頃の行いがよければ見える」とのことだったので、そうであれば、私などは最初から見えないだろうと思ってはいた（笑）。しかしまあ、晴れて空気が澄んでいれば見えるのだろうし、夜であれば釜山の明かりがいつも見えるとのことだった。この展望台の側には、朝鮮から対馬に向かった使節団が遭難し、全員が亡くなったことを弔う「朝鮮国役官使受難の碑」も建てられていた。

対馬を知ろうとした時、普通の人はずっと最初に何を読むだろうか。おそらくは、司馬遼太郎の『街道をゆく 13 壱岐・対馬の道』（朝日文庫、1985年）なのではあるまいか。よく知られたシリーズものの本だからである。今回私も初めて手にしてみた。この本によれば、対馬の宗氏は李氏朝鮮に寄生しており、「室町期以来、李氏朝鮮は対馬宗氏に米豆を年に二百石あたえつけてきた。でなければ倭寇になってやってくるため」であり、日本は非常に「厄介な隣人」だったと記されている。秀吉の朝鮮侵略で途絶えた日朝関係だが、徳川期に入ると対馬藩は関係の回復に務める。しかしこれも「虫のよさ」だと一蹴されており、それどころか、「朝鮮人が『倭』を忌むことはなはだしく、いまもそれがつづいていることは、ことごとくといっていいほど無理のないこと」であるとまで書かれている。

司馬遼太郎がそんなことを考えていたとは、不勉強な私はこれまでまったく知らないでいた。明治維新を牽引した「勤王の志士」たちによる「尊王攘夷」の皇国思想が、征韓論（それにしても、「征韓」とは恐れ入った表現ではある）から韓国併合まで連なっていたことを考えると、そしてまた、対馬藩にさえも朝鮮進出論が登場したことなどを振り返ると、彼の指摘は正鵠を射ているのではあるまいか。明治維新の立役者たちのほとんどが、こと朝鮮との関係から眺めると、実にろくでもない人物ばかりである。吉田松陰などは、「神功（皇后）の未だ遂げざりし所を遂

げ、豊国（豊臣秀吉）の未だ果さざりし所を果たすに如かず」とまで言うのである（韓桂玉『「征韓論」の系譜』三一書房、1996年）。何をか言わんやであろう。

他にこんなところにまで足を運んでいるのは誰かと思って調べていたら、民俗学者の宮本常一が何度も足を運んでいたことを知った。書棚にあった『旅する巨人宮本常一—につぼんの記憶—』（みずのわ出版、2006年）によると、彼は1950年、56年と62年の三回対馬に渡ったようだが、宮本の『わたしの日本地図 15 壱岐・対馬紀行』（同文館、1976年）を見ると、1974年にも出かけていた。前著での佐野眞一の解説によれば、この本は「生まれ故郷の山口県周防大島町以西の九州各地を歩いた宮本常一の足跡を、宮本が撮影した写真をもって再訪したルポ」であり、「写真のなかの関係者を新聞記者が捜し歩いて、その地域に流れた30年から50年の時間をあらためてたどり直し、日本人が忘れてしまった記憶を蘇らせようとする好企画」だというのが、まさに同感である。

当時宮本が撮った写真に写されている人物を探り当てようと、読売新聞西部本社の記事たちは東奔西走するのであるが、その執念が何とも凄い。たいしたものである。同じ解説で佐野は、「宮本が余人の追従を許さないところは、その後の変化を見るために、一度訪れたところを必ず再訪していることである」と指摘しているが、もしかしたら、記者たちはこうした宮本の調査にかけたあくなき探求心にほれ込んで、宮本亡き後にそれを再現しようとしていたのかもしれない。

宮本常一が最初に対馬に出かけたのは1950年8月であるが、この年の6月には朝鮮戦争が勃発し、8月から9月にかけて半島の南端にまで追いつめられた米韓軍と、朝鮮半島の大部分を制圧した朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の間で、洛東江（ラクトンガン）を挟んで釜山橋頭堡をめぐる激しい戦いが繰り広げられていた。金日成は全土制圧をめざして最後の大攻勢をかけていたし、それを迎え撃つ米韓軍も、半島から追い落とされる恐怖を背に死に物狂いの反撃を試みていたのである。その頃に、宮本は対馬の北にある佐護の千俣蒔山に登った。彼が『私の日本地図』に書いているところによると、「頂上に立っていると遠くの方に雷の鳴るような音がする。しかし雷ではないようだ。空がはれていて一点の雲もない。『あの音は何でしょう』と泉さんに聞いてみたが泉さんも首をかしげてなんだろうと考え込む。ふと朝鮮戦線での大砲の音ではないだろうかということに気付いた」という。わずか50キロ先の当時の様相を想像すると胸が痛む。

ところで、宮本の対馬に関する文章は、『日本残酷物語』の第二部「忘れられた土地」（平凡社、1960年）や『忘れられた日本人』（岩波文庫、1984年）にも登場する。前者には、「対馬はむかしから大陸の文化がはいってくる関門であり、日本人のでゆく関門でもあった。そうした特殊な地理的条件から芽ばえた、生き生きとした民衆の冒険心と活動力が鎖国によってたちき

られたとき、対馬の人々の鬱屈と労働の物語がはじまるのである」といった興味深い文章も見える。彼が描く対馬の歴史も面白い読み物になっているが、もっと面白いのは後者の『忘れられた日本人』の方であろう。名著の誉れ高いこの本だが、昨年5月に前学長の矢野さんと相前後して亡くなった経済学部の松浦さんから、私は昔々に教えてもらった。酒飲み話のついでに、「土佐源氏」を読むように勧められたのである。性をめぐる話が好きなようだから、きっと関心を示すはずだと松浦さんは思われたのであろう。

文庫本の解説を書いているのは網野善彦だが、彼は次のように指摘している。「就中注目すべきは、宮本氏が女性たちのまことに解放的な『エロばなし』をはじめ、ある種の性の『解放』について、各所でふれている点」であり、「宮本氏は男女の関係について、通常の『常識』と異なるあり方が庶民の世界に生きていることを語ろうとしているかにみえる」と。そしてそこには、「家父長制一本鎗の農村理解に対する宮本氏の批判的角度的意識的な強調」があるのだという。なるほどと思う。もちろん私などは、解放的な「エロばなし」のみを抽出して「下心」丸出しで興味津津読んだだけなのだが、昔の日本人の間には何ともおおらかな性の世界が存在したことを知って驚いた。松浦さんに勧められた「土佐源氏」は、失明し乞食にまで身を落とした元馬喰が自らの女性遍歴の数々を淡々と語ったものなのだが、そこには今風の下車たいやらしさはまったくと言っていいほどない。以下の文章を読むと、その訳が垣間見られるのではあるまいか。落魄の身になってからの回想録だからなのか、どこか哀切な響きさえある。

「どんな女でも、やさしくすればみんなゆるすもんだ。とうとう目がつぶれるまで、女をかもうた。そして、そのあげくが三日三晩目が痛うで見えんようになった。極道のむくいじゃ。わしは何一つろくな事はしなかった。男ちう男はわしを信用していなかったがのう。どういもんか女だけはわしのいいなりになった。わしにもようわからん。男がみな女を粗末にするんじやろうのう。それで少しでもやさしうすると、女はついて来る気になるんじやろう。そういえば、わしは女の気に入らんような事はしなかった。女のいう通りに、女の喜ぶようにしてやったのう。(中略) あんたも女をかもうたことがありなさるじやろう。女ちうもんは気の毒なもんじゃ。女は男の気持になっていたわってくれるが、男は女の気持になってかわいがる者がめったにないけえのう。とにかく女だけはいたわってあげなされ。かけた情は忘れるもんじゃアない」。

解放的な「エロばなし」は、『忘れられた日本人』の冒頭に置かれた「対馬にて」にも登場する。その様子を紹介してみよう。「対馬には島内に六つの靈験あらたかな観音さまがあり、六観音まいりといって、それをまわる風が中世の終り頃から盛んになった。男も女も群れになって巡拝した。佐護にも観音堂があって、巡拝者の群れが来て民家にとまった。すると村の若い者たちが宿へ行って巡拝者たちと歌のかけあいをするのである。節のよさ文句のうまさまで勝敗をあらそうが、最後にはいろいろのものを賭けて争う。すると男は女にそのからだをかけさせる。女が男にからだをかけさせることはすくなかったというが、とにかくそこまでいく。鈴木老人

はそうした女たちと歌合戦をしてまけたことはなかった。そして巡拝に来たこれというような美しい女のほとんどと契りを結んだという。前夜の老人が声がよくてよいことをしたといわれたのはこのことであった」とある。明治の終り頃までは、対馬の北端には歌垣が現実に残っていたのである。

これは1950年の対馬行での話だが、翌年には佐護に近い佐須奈（ここは鎖国体制下の徳川時代も開港場だった）で宮本は一升瓶をさげて60過ぎのばあさんたちの歌を聞きに行く。「相手がうたうところにも歌を要求する。私はそんなに知っているわけではないけれど、とにかく、すすめられると三度に一度はうたう。歌合戦はこうしておこるものだったと思った。とにかくだんだん興奮してくると、次第にセックスに関係の歌詞が多くなる。若い連中はキャアキャアいって喜ぶが、ばあさんたちはそれほどみだれない。夜がふけて大きい声でうたうものだから近所の人も家の前に群がって来た。そうして三時ごろまでうたいつづけたのである。無論その間には話はずんだのであるが、それではじめてこの地方の歌合戦というものがどのようなものであったかおぼろ気ながらわかったような気がした」と書いている。

このばあさんたちは、翌日佐須奈から巖原に向かう宮本たちをわざわざ港まで出て見送ってくれたようで、その写真が『旅する巨人宮本常一』に載っている。見送りの村人たちの端に居住まいを正して立つ彼女たちの姿が、何ともほほえましい。『わたしの日本地図』によれば、ばあさんの一人は涙をためて次のような別れの言葉を言ったという。「もうお目にかかることはないだろうが、ゆうべのようにたのしかったことはなかった。死ぬるまで忘れないだろうが、あなたもいつまでもゆうべのことを忘れないでほしい」と。記者たちは、こんなことを書き留めている宮本の視線の温かさを感じ取っていたはずである。彼は、「ノートを出しては気分がこわれるからと思って、ただきくだけにした」ようだが、その歌詞とはいったいどんなものだったのであろうか。

対馬にて（2）－「太古の心性」と笑い－

こんな話のついでに書き留めておきたいのだが、福泉洞から釜山港に向かうバスの車中で、ガイドの女性が韓国版の艶笑譚（コリアン・ピンク・ジョークとでも言おうか）を聞かせてくれた。一般の観光客の場合なら場を和ませるためにもっと早くに聞かせていたのかもしれないが、われわれが大学の教員一行だということもあったのか、最後の最後に聞かせてくれた。彼女の話によれば、韓国では女性を果物に男性を火に例えるのだという。女性から紹介してみると、10代は胡桃、20代は栗、30代は蜜柑、40代は西瓜、50代はトマト、60代は柘榴、70代は棗、80代は花梨に例えられるとのことだった。それに対して男性は、10代は燐寸、20代はライター、

30代は薪、40代は焚火、50代は煙草、60代は火鉢、70代は聖火、80代は蛍、90代は鬼火だという。私は大いに笑い、忘れないようにとメモまでとった。

彼女は、女性不在の気安さからか「そのころは」というところまで話してくれたが、そこまであけすけに書くのは、いかに品性下劣な私でも気が引けるし社研の関係者に迷惑を掛けそうな気もするので、さらに詳しく知りたい方がいれば（真面目な同僚諸氏ばかりなので、恐らくないであろうが）、直接小生に尋ねていただきたい。こんなことを紹介して一体何が言いたいのかといえば、韓国の人間も日本の人間も、玄海灘を行き来してきただけあって、いかにも似た者どうしだとの素朴な思いである。社研の『月報』582号で、「性にまつわることが哄笑をさそうのは、太古の心性をもちえている諸国民に共通のことがらであって、性は、人間の元気、活気、生産といったことと深くむすびついている」との多田道太郎の言（『しぐさの日本文化』筑摩書房、1972年）を引いたことがあるが、そのことをあらためて思い出した。朝鮮文化の影響を深く受けてきた日本も、ほぼ共通の「太古の心性」を持っているはずなので、お互いが似ていて当然である。

日本の場合、「太古の心性」にもとづく笑いは、『古事記』に描かれた神話の世界にも現れている。角川ソフィア文庫には、「ピギナズ・クラシックス日本の古典」シリーズがあり、その一冊である『古事記』の訳文から紹介してみよう。

さて、天上の神々の合議により、イザナキ・イザナミの男女二神に、「この浮遊している国土を固定し、整備せよ」という命令が下った。そのときに天の沼矛（ぬぼこ）という神聖なる矛を授けて委任した。そこで、この二神は天と地の間に架かる天の浮橋に立って、天の沼矛を地上にさしおろし、かきまわした。海水をコオロコオロとかき鳴らして、引き上げる時に、矛の先から滴る潮が積もり固まって島となった。これが、潮がおのずから凝り固まってできたというオノコロ島である。

イザナキ・イザナミはこのオノコロ島に降りて、結婚のための聖なる太柱と広い神殿を建てた。そしてイザナキがイザナミに、「あなたの体はどんなふうになっていますか」と尋ねた。イザナミは「私の体は完成しましたが、塞がらない裂け目が一か所あります」と答えた。するとイザナキが「私の体も完成したが、よけいな突起が一か所ある。だから私の体の突起したものを、あなたの体の裂け目に差し入れて塞ぎ、国生みをしようと思う。国を作りたいがどうだろうか」と誘うと、イザナミは「それはいいですね」と賛成した。

そこでイザナキは「それじゃあ、二人でこの聖なる柱を回り、出会ってから交わりをしよう」と言った。

これが神話世界における天地創造の物語であるが、考えてみると、後段は勿論のこと、前段も男女の媾合を暗示させるようなじつに妖美な表現なのではあるまいか。後段のように、「成り成りて、成り合わぬ処」とか「成り成りて、成り余れる処」とかと書かれると、フランスの艶笑小咄でも読んでいるかのようである。この文庫の解説者は、後段の「この一段、かなり露骨な性行為の描写でよく知られている。世界の神話にも類例のない奇抜な場面だが、眉をひそめることなく、古代の性教育のなごりくらいに考えるのも楽しいではないか」と書いているが、

私などには「眉をひそめる」人がいることの方が不思議である。何でもかんでも「下ネタ」で一括りするような怠惰な評言ばかりが溢れているが、じつに馬鹿馬鹿しいことである。もっと大らかに笑うことはできないのか。

林芙美子は、「古事記のなかの、天のぬぼこも、古代人の品のいいイマアジュであり、これほどエロティックな由来記があるであろうか。こうした洒落の深い歴史を、あとになって、大真面目に書きたてゝあるところに、後代の日本人の洒落やほほえみを忘れたいじまさが哀れなものになるのである」と書いているようだが（『田辺聖子の恋する文学 一葉、晶子、芙美子』新潮文庫、2015年）、さもありませんかと思う。「大きな海に棒をつゝこんで、したたった滴が島になって日本が発生するという歴史を、何と云うありがたい国かと人しれずほゝえむことが知らされていないのだ。この位、洒落たエロチックな神話は仲々他国にないのである。まことの人間が生きてゐたしるしであろうか」。こういう文章を読んで素直に微笑みたいものである。

ついでに、日本最古のストリップについてもふれておこう。あまりに有名なので、誰もが知っている話であろうが、ここで重要なのは、それを見て八百万の神が大いに笑っていることである。わが国の神々も結構猥褻だったんだなあと思ってもらってもいいし、昔は性をめぐって大らかな笑いがあったんだなあと思ってもらってもいいだろう。わが国最初のストリップショーは、敗戦から1年半ほどたった1947年に新宿の帝都座で催されたらしいが、その中身たるや、名画に扮して上半身裸の女性が数十秒間、額縁の中に立つといったもので、これがいわゆる「額縁ショー」と呼ばれたものである。古代の神々のおおらかな笑いと比べると、何ともいじましいかぎりである。

次に、強力男神アメノタジカラオが天の岩屋戸の脇に隠れ立ち、芸能女神アメノウズメは天の香久山聖なる日陰葛を褌にしてかけ、聖なる真折の葛を髪飾りにして、天の香久山の笹の葉を束ねて手に持ち、天の岩屋戸の前に桶を伏せて踏み鳴らし、神がかりして乳房を露わにし、藻の紐を陰部に垂らした。それを見て、天上界が鳴り響くほどに大勢の神々が爆笑した。

こんなふうに見てみると、百歳以上も生きた天皇が続々と登場するような、そしてまたいたのかいなかったのかわからない神武天皇を始祖とするような『古事記』や『日本書紀』を大真面目に持ち上げ、あれこれの遺物をさもいわくありげに祀っている多くの神社の方がどうかしているのではあるまいか。そう言えば、対馬にも「神功皇后の三韓征伐」といったありもしないいわれに由来した八幡宮神社などもある。韓国の人が「三韓征伐」などを知ったらいったいどう思うであろうか（吉岡吉典『韓国併合』100年と日本』新日本出版社、2009年）。神功皇后ついでに思い出したが、福岡にはこの皇后を祀った香椎宮があり、昔学会のついでに足を延ばしたことがあったが、今でも戦前の腐臭がプンプンと漂うようないかにも胡散臭い神社であった。

それはともかく、歴代の天皇も天皇制も始まりは結構いい加減なものだったと思えば、気は

楽になるはずである。ついでに、三谷菜沙夫の『淫の日本史』(桜桃書房、1999年)でも紐解いてもらおうと、もっとすっきりするのではなからうか。これまでも元号の使用については必要最低限にとどめてきたつもりだが、平成天皇が退位されたら、私はもう元号などからすっかり足を洗おうと思っている。もはや「君が代」でも「我が世」でもなく、「我々が代」なのである。天皇の死や退位によって時代を画そうとすること自体が、今ではすっかり時代遅れとなっているのではあるまいか。天皇がそれほど偉いわけでもなからう。

対馬にて(3) - 金田城と防人 -

対馬では、北端の比田勝から南端に近い巖原までバスで縦断した。対馬は島の八割がたが山だということから、急峻ではないものの山また山が続く。途中和多都見神社や圓通寺、大船越、万関橋を通ったので、その由来をいちいち知った。圓通寺には、室町時代に朝鮮国王の使節として日本を幾度となく往復して日韓の交流に尽力した李藝の、その「人柄と底知れぬ度量に感動」して建てられたという碑があった(どんな人物であったのか興味がわいたので、戻ってから調べてみたら、彼に関する本もDVDもあることを知った)。翌日は、歴代の対馬藩主であった宗家代々の墓所である万松院や金石城も訪ねた。こんなふうに一瞥しただけでも、対馬が多くの歴史遺産を抱えた島であることがうかがわれた。

さまざまな歴史遺産のなかで、私にとってもっとも興味深かったのは、浅茅(あそう)湾の南岸にあった金田城(かなたのき)である。海に面した山崖を利用して築かれた古代の山城が金田城であるが、由来によれば667年に作られたという。少しばかり歴史的な背景を紹介しておく、7世紀の朝鮮半島では百済・新羅・高句麗の三国が抗争を繰り返しており、倭国は半島南部の百済と同盟関係を結んでいたという。660年に唐と新羅の連合軍が百済を滅亡させるに至り、百済再興のための救援要請を受けた倭国は、朝鮮半島に援軍を送ったものの663年の「白村江の闘い」で大敗するに至る(土生田さんに言わせると、「コテンパンにやられた」らしい)。そのため、唐と新羅が日本に侵攻してくるかもしれないとの強い危機感から、壱岐や対馬や筑紫などに防人を配置して急を知らせる烽(のろし)が設置されたのだという。こうして西日本各地に山城が築かれたようで、金田城の朝鮮式の山城もその一つというわけである。

バスから降りて山道をしばらく登ると、山肌に岩を積み上げた山城跡の城壁や石塁が現れる。この日も天気は良く汗ばむほどの陽気だった。入り江が深く切り込まれた浅茅湾を山城跡から望むと、山々の深い緑と蒼く澄み切った海、そして晴れ渡った空が対照的で何とも美しい。東国から徴発された防人たちは、荒海で知られた玄界灘を渡ってこんな山奥まで来ていたのである。そこで露営を続けながら、3年もの間見張りを続けていたというのであるから、いまさら

ながら驚く。いくら大君の命とはいえ、辛い任務であったことだろう。防人たちは、海と山を眺めながら望郷の念に駆られていたのではあるまいか。往時を思っばんやりと浅茅湾の景色を眺めていたら、自分もまた防人の一人になったような気さえしてきた。

防人たちは武具や食糧を自前で準備して任地に向かったというし、任地では自給自足の暮らしだったらしい。生きて帰れる保証などなにもなかったから、防人本人も大変だったろうが、彼らがいなくなった東国の農村も深刻な労働力不足に陥って、残された家族も苦難を強いられたという。防人と言えば『万葉集』であり、巻二十には「防人歌」が収録されている。そこには、望郷の念や故郷に残してきた親や妻や子供たちへの思いと惜別の情に満ちた歌がある。よく知られているのは次のような歌である。

父母が 頭搔きなで 幸くあれて 言いし言葉ぜ 忘れかねつる
韓衣 裾に取りつき 泣く子らを 置きてぞ来ぬや 母なしにして
防人に ゆくは誰が夫と 問ふ人を 見るが羨しさ 物思ひもせず

しかし、「防人歌」とのつながりですぐに思い起こされるのは、巻十八にある大伴家持の長歌からとられた「海ゆかば」であろう。「海ゆかば水漬く屍 山ゆかば草むす屍 大君の邊にこそ死なめ かえりみはせじ」という歌詞であり、信時潔が作曲した。戦前は第二の国歌ともなり、「玉碎」時には必ずラジオから流されたこともあって、あまりにも悲壮かつ荘嚴な歌となった。ネットで当時の映像を探すと、息子や夫を亡くした大勢の喪服姿の母親や妻たちが靖国神社の拝殿前に正座し、兵士たちが直立不動で捧げ銃をするなか、神官が通り、天皇をはじめとした皇族たちが「英霊」の御霊安かれと頭を垂れる、そんななか「海ゆかば」が流れるのである（映像の場面で実際に演奏されたかどうかはわからないが、いかにもありそうである）。数多くの若者たちが「大君の邊」に命を落として「屍」となっていくのに、そしてまた無数のアジアの人々が侵略戦争の戦火の犠牲となったのに、「大君」であった昭和天皇は、いったいどんな責任をとったというのであろうか。今でも許しがたい思いは消えない。

1975年、訪米を前に行われたニューズウィーク誌との会見で、戦争責任について問われた昭和天皇は、「そういう言葉のアヤについては、私はそういう文学方面はあまり研究もしていないのでよくわかりませんから、そういう問題についてはお答えできかねます」などと述べたのであるが、「大君」にあるまじきあまりにも恥ずかしき発言である。一人の人間としてみても愚劣きままりない。作家の藤枝静男も詩人の茨木のり子も、「天皇個人への怒り」を感じたようだが、当然の感性なのではあるまいか。天皇もまた天皇制の犠牲者であるなどしたり顔で語るようでは、人が良すぎるにもほどがあると言うべきだろう。そこまでの人の良さはもはや罪である。自衛隊の音楽隊などは、今でも「海ゆかば」を演奏したり歌ったりしているようだが、こんな

「大君の邊」に「屍」となろうとでもいうのか。

件の土生田さんは、金田城で休んでいる時、『海ゆかば』は家持の天皇に対するゴマスリの歌ですよと喝破したが、さもあらんと思った。「防人歌」のなかには「今日よりは 顧なくて大君の 醜の御盾と 出立つ我は」といった歌のようなものもたくさんある。「醜の御盾」（しこのみたて）といった言葉も戦前よく使われたらしい。権力闘争の渦中であつた選者の家持が、天皇を意識して選んだものもあつたであろう。しかし、防人たちの本心はそんなところにはなかつたのではあるまいか。「防人歌」がもてはやされるようになったのは先の大戦からで、戦意高揚と忠君愛国の宣揚のために政府が大々的に利用した結果、その存在が広く世に知られることになったのだという（このあたりのことについては、太宰府天満宮の側にあつた九州国立博物館のショップで手に入れた郷土歴史シリーズの一冊である『防人』（さわらび社）に詳しい）。

ところで、冒頭で触れた武田祐吉には、『勤皇秀歌（萬葉時代篇）』（聖紀書房、1942年）なる著作がある。この本は、「我が國は、太古以來尊嚴無比なる國體を護り來たり、國民は、その國體の本義に依り、崇高なる勤皇精神を以て、活動の指針と爲したのである」などと書き始めるような何とも怪しげなものなのだが、ここでは時代の相を反映して「海ゆかば」が天まで持ち上げられている。例えば、「日本民族の祖先が、數千年前の古代に於いて、かやうに堂々と國民精神を發揚してゐることを、この歌に依つて知り得るのは實に快絶である」などと述べられるごとくである。家持もゴマをすつたようだが、武田も、それほど恥ずかしげもなく時代にゴマをすつていたのであろう。そんなことを思うと、時代に興奮し感激することの多かつた萬葉愛好の歌人などよりも、虚子のように花鳥諷詠に徹して落ち着いていた俳人の方が、よほど立派だつたと言えるのではあるまいか。

さらに付け加えておけば、武田には当時の文部省思想局が編纂した日本精神叢書（因みにこの叢書は、國民の「日本精神の心解と體得とに資せしめる」目的で刊行されたものである）の14では「萬葉集と忠君愛國」（1936年）を、26では「萬葉集と國民性」（1937年）を出している。前著では、忠君愛國の精神やら皇室の慈恩やら報國の精神やら神ながらの國やらを説いてるし、後者でも萬葉集と日本精神やら敬神崇祖やらを説いている。言ってみれば、当時の国粹主義的なイデオロギーの宣伝と普及に、一役も二役も買っていたわけである。にもかかわらず、戦後に出た『武田祐吉著作集』全8巻（角川書店、1973年）では、先の『勤皇秀歌』をはじめこれらの著作はすべて除かれ、彼はただただ上代文学に関する真面目な学究でもあつたかの如くに取り扱われているのである。あまりにも厚顔無恥であり、いい加減が過ぎるのではなからうか（旭日と富士をさんざん描いて神州日本を讃仰していた横山大観が、戦後「私はただの風景画家でしたから」などと平然と居直っているのによく似ている）。

こんなことを書き連ねているうちに、堀田善衛の『故園風來抄集』（集英社、1999年）に収録

されている「古事記から万葉集へ」というエッセーを思い出した。それによれば、彼は学生時代に、すでに全員が特攻隊員となっていた霞浦海軍航空隊の士官たちのとんでもない宴会を目撃する。狂乱の挙句、二階の広間から皿小鉢や卓袱台が放られただけではなく、畳まで剥がされて投げ捨てられ、庭の灯籠も倒れたという。乱痴気騒ぎがすんだ後でその部屋に入ると、墨で黒々と「敵艦轟沈、天皇陛下万歳」などと記されていただけではなく、その下には驚いたことに生々しい「男女媾合の図」があったという。この「男女媾合の図」には、性をめぐる大らかな笑いなどひとかけらもない。

堀田は、「痛ましいばかりの内心の荒廃が露呈」した「デカダンス」であったと書いている。逃れようもない死によって生み出された「荒廃」であり、「デカダンス」であったはずである（百田尚樹の『永遠のゼロ』などがふれようとしないう一断面である）。しかも、そこには万葉集と古事記の岩波文庫が放り出されていたという。この二著は、「大君の邊」に「屍」となることを受け入れさせる格好の手段として、大いに活用されたのであろう。堀田は、「防人歌」などを持ち上げて若者たちの思想改造に熱中した「犯罪的な思想家たちに対する憎悪」から、戦後20年にわたって「古事記と万葉集を手にするのを拒否して来た」のであった。「憎悪」とまで書く堀田にこそ、深く学ぶべきものはある。

博多にて一大宰府政庁跡に佇む一

対馬では他にも見たいものがあつた。樋口一葉の師でもあり恋人でもあつた半井桃水の生家跡に建てられた「半井桃水館」もそうであつたし、「島の秋」で知られる吉田弦二郎の文学碑などもそうである。時間の関係でともに見ることはできなかったが、やむを得ない。半井桃水は厳原に生まれ、少年時代に釜山に渡り、その後上京して東京朝日新聞の小説記者となつて活躍する。その間に、通信員として釜山に駐在している。先に引いた『田辺聖子の恋する文学』には、「一葉はあたかも処女であるかのように日記では描かれていますが、それを否定する研究者もいます。死の間際に素晴らしい作品を噴出するように書けたのは、一葉が恋に溺れたことがあつたからこそだということです」という一文がある。そのことの詮索にあまり興味はないが、一葉が後世に残る作品を短期のうちに紡ぎあげる力となつたのは、周りの中傷もあつて別れはしたものの、「終生変わらぬ桃水への恋」だつたのだらう。

同じ田辺聖子の『一葉の恋』（世界文化社、2004年）には、「桃水は、明治の男にしては、さっぱりした女への対し方ができる男であつた。そして、女に親切的な心づかいや、やさしい思いやりを見せて、いやみがなかつた」と描かれている。桃水の小説の好みは夏子（一葉）と共通していたようで、そんな男に夏子は恋心を抱くのである。だが、「しかしいまは、桃水との結婚

に夢を賭けるよりは、夏子は、小説に虹を描いていた。桃水に対する恋ごころは夏子の全身をあけぼの色に染めながら、それは、桃水をなま身の男と見ることでもなかった」と記されている。「全身をあけぼの色に染め」と書く田辺の美しい文章を見ると、まるで彼女自身が一葉に恋しているかのようでさえある。

もう一人の吉田弦二郎は、早稲田大学在学中の1906年に対馬要塞砲兵大隊に入隊し、その後再び対馬重砲兵大隊に入隊する。彼の作家としての名声を決定づけた作品が、対馬での体験をもとにした「島の秋」である。大正から昭和初期にかけてかなりの人気作家として活躍した吉田だが、今はもう知る人も少なくなったので、そんな彼の文学碑を訪ねる人も珍しくなっていることだろう。風化も進み碑文の文字が読みにくくなっているという。大学の図書館で「島の秋」を探して読んでみたが、「満天の星河は秋らしい清爽の気に充ちていた。幾萬と限りもない漁火が玄海を埋めて明滅していた。大きな山蛸が道を横切って滅えた」といった筆致からうかがわれるように、静寂と寂寞と悲哀に充ちた対馬の物語だった。

野田宇太郎の『文学散歩』の22巻には対馬がとりあげられており、そのなかに「対馬と吉田弦二郎」の項がある。そこには、「もしわたくしが大正時代の小説名作集を編むとすれば、それがたとえ十数篇程度の厳選でも、吉田弦二郎の『島の秋』と『山上の小屋』の対馬小説二篇は先ず候補に挙げるだろう」と記されている。そんなわけだから、「山上の小屋」も是非読んでみたかったのだが、残念ながら図書館でも見つけられなかった。全集にでもあたらないと読めないのかもしれない。吉田の文学碑にたどり着いた野田は、「このような文学碑が守りつがれるためには、先ずその文学を皆が読むことが大切なのはいうまでもないが、今の対馬に『島の秋』を読んだ者がはたして幾人いるというのだろうか。わたくしはここに来て文学碑の虚しさを知る思いがした」と述懐している。吉田と似た心境だったのかもしれない。その吉田弦二郎は、世田谷の玉川に隠棲し、妻と死別後孤独と病苦のなかで晩年を送ったという。厳原港の売店で見つけた『対馬ブック』の3号に文学碑の写真が載っていたので購入しておいた。

厳原を発って博多に向かったわれわれは、再び船中の客となって玄界灘を渡った。今回もまた拍子抜けするほど穏やかな海だった。福岡では九州経済調査会の方から、北部九州と韓国南部の経済交流についての話を聞いた。経済学部にも所属しているというのに、経済交流に関する話についてはただおとなしく聞いていただけだったが、彼が主張した「ボーダーツーリズム(国境観光)」には興味をそそられた。初めて聞く言葉だったが、国境をはさむ境界地域を「交流の最前線」として位置付け、観光を通じて関心を高めようとする試みだという。国境は、対立している時には「分断」が表面化することになるが、良好な関係の時には「交流」や「連続」の要因となるのであり、安全保障の観点からも「交流」と「連続」を重視すべきだというのである。

玄界灘をはさんで日朝関係史を探訪してきたわれわれの旅は、まさにボーダーツーリズムそのものとも言えるのかもしれない。対馬を「国境の島」とのみとらえて、領土やら防衛やら自国中心的な歴史の視点ばかりを強調するのではなく、「交流の最前線」ととらえ直す視点が私にはとても新鮮だった。対馬の若い経営者で『知っとたあ？こんな対馬の歴史！』（この冊子も厳原港の売店に置いてあった。発行は2009年の2月11日で、わざわざ「建国記念日」とルビがふられている）の著者は、対馬の歴史をあれこれ探索しながら、「日本人が天皇家を大切に想う気持ち」や「教育勅語」で説く道徳の大切さを称揚し、「日本国・救国の対馬三大聖地」の第一に金田城をあげたりしているのであるが、そんな彼女にこそしっかり聞かせたいような話だった（こんな冊子に対馬市教育委員会の教育長が「推薦のこぼ」を寄せているのを見て、いささかうんざりした）。冒頭でふれた朝鮮通信使なども、対馬との関係だけで見れば、江戸時代の大がかりなボーダーツーリズムのようなものだったのかもしれない。

旅の最後は太宰府天満宮である。土生田さんに引率されて天満宮と九州国立博物館（ここは、「日本文化の形成をアジア史的観点から捉える博物館」を基本理念としているという）を訪れた。穏やかな陽春の日差しに恵まれた天満宮は、梅が見頃な時期と重なったこともあって、大勢の観光客でごった返していた。私は菅原道真にそれほどの関心はなかったの、あちこちをのんびりと眺めてわずかばかりの土産物を買っただけだったが、同行の原田さんが道すがらとある立札を見つけてくれた。それは、私も卒業生の一人である県立福島高校の卒業生たちが、昨年「献梅」したことを記したものだ。こんなところにそんなものが立てられていて私も驚いたが、そういえば高校の記事は梅だったから、そんなつながりもあったのかもしれない。昔歌った「記事は香りのいみじき梅花」で始まる校歌を思い出した。じつは釜山でも、故郷の福島市から来たという中年女性の二人連れと出会い、町田さんに私も加わってあれこれと田舎のことで話はずんだが、旅をすると妙なところに妙な出会いがあるものである。

ところで、太宰府天満宮の由来だが、道真は宇多天皇の信任を得て異例の出世を遂げ、醍醐天皇のもとで右大臣にまで上りつめる。しかしその後左大臣藤原時平の讒言で太宰権帥（ごんのそつ）として左遷される。中央政権から隔離されて何の実権もなかったようだから、軟禁に等しかったのだろう。失意のうちに道真が死んだ直後から、都では天変地異が相次いだため、貴族たちにはそれらは道真の怨霊のなせる業だと受けとめられたようだ。そこで、道真の霊を鎮めるために政庁のはずれに天満宮ができたのだという。参拝を終え駅で別れて皆はそれぞれ帰路についたが、町田さんと嶋根さんは帰りの便まで時間があるとのことだったので、土生田さんの勧めに従って、三人で近くにある大宰府政庁跡にまで足を延ばしてみた。

天満宮は人であふれかえっていたが、政庁跡まで出かける観光客はほとんどいないようで、じつに静かな広々とした場所だった。大宰府は、律令国家体制の下に設置された地方の役所と

しては、最大のものであったという。「遠の朝廷」（とおのみかど）とも称されて、「白村江の戦い」に敗れた日本にとって、重要な防衛拠点として位置付けられていたようで、周辺には水城（みずき）が作られている。跡地に立つと大きな礎石がずらりと並び、芝生のはずれには三基の石碑が寂しげにぽつんと建っていた。いかにも古代人の面影が偲ばれるような場所であった。付設の展示館を見て、次に戒壇院と観世音寺をめぐった。静けさの中に佇む古刹には、何とも言えぬ趣がある。観世音寺の梵鐘はわが国最古のものだという。この寺の宝蔵には、大きな馬頭観世音菩薩立像をはじめ見ごたえのある仏像がたくさん並んでいた。

太宰府天満宮で手に入れた『改訂つくし風土記』（つくし青年会議所、1989年）によると、『土』で知られる長塚節は、結核の療養で九州に滞在している間に、九州一円を旅し対馬にも足を延ばしている。「自然を酷愛」したという彼らしい。明治45年の「對州巖原港にて」という短文は、「對州へ渡るには博多から夜出て朝着く」との書き出しから始まる。今では信じられないほどの時間がかかったのであろう。その彼は観世音寺がいたく気に入ったようで、何度も訪れたらしい。亡くなる前年の晩秋にも訪れ、歌を詠んでいるが、それによれば梵鐘に手をあて爪を叩いてその「かそけき音」を聴いたとある。「手をあてて鐘はたふとき冷たさに 爪叩き聴くそのかそけきを」と刻まれた歌碑が、観世音寺の参道脇にあった（あまりに達筆でほとんど読めなかったので、帰宅してネットで調べてみた）。彼は翌年九州帝大付属病院で37歳の短い生涯を終えた。ところで、先の大宰府政庁跡の展示館には、詩人の安西均の「都府楼址」と題する詩が展示されていた。ここでいう都府楼とは政庁の別称である。その詩を紹介してみよう。

むかし／ここに大宰府政庁があった
身じろぎもせず眠っている／このさびしげな礎石のうえに／「遠の朝廷」がそびえていた
旅びとよ／見えざる朱の円柱にもたれて／しばしを憩いたまえ
見えざる甕を濡らす青磁の雨も／やがては霽（は）れるであろう
まぼろしの朱雀大路のかなたから／淡い水たまりを踏みながら／天の牛車も帰ってくるだろう
心しずかに砂の忍び音をききたまえ
千年の梅が香を襟に挿して／ふたたび旅をつづけたまえ

旅の終りに一抹の寂しさが募っていくのはいつものことだが、今回もまたそうだった。東京に向けて闇を駆ける新幹線のなかで、もうしばらく続くであろう人生という旅のことを、ひとりぼんやりと思った。

（付 記）

私は毎週月曜日に教職員食堂で昼食をとるのだが、そこには、出校日が重なっている魏さんがいつもいる。知り合いになったこともあって、食事をしながらあれこれとりとめのない話をする。そうすると、時に話は思いもかけぬ方向に広がっていくことがある。先日は、朝鮮の

興味深い人物として私も関心を払っている李藝や李舜臣、安重根などについての話を聞いていたのだが、そうしたら魏さんが、茨木のり子や尹東柱（ユン・ドンジュ）を知っているかと聞いてきた。茨木は好きな詩人のひとりだったのでそう答えたら、彼女の訳と編の『韓国現代詩選』（花神社、2007年）があるとのことだった。そう言われて、彼女が韓国に多大の関心を示していたことを思い出したが、韓国の詩を訳していたことは知らなかった。教えられて急に読んでみたくなった。

もう一人の尹東柱であるが、彼は1945年2月に福岡刑務所で獄死している。彼の名前だけは聞いたことがあって詩集まで購入していたのに、これまでまったく開いてもいなかった。『空と風と星と詩』（岩波文庫、2012年）というタイトルの詩集である。さっそく読んでみたが、「民族運動」を扇動したとして治安維持法違反で囚われの身となり、わずか27歳で獄死したこともあってなのであろうか、刻まれた言葉が静かに心に染み入ってきた。尹の詩集の冒頭に掲げられた「序詩」を最後に紹介しておこう。そこには、日本によって侵略され続けてきた祖国と同胞を「すべての絶え入るもの」とみて、それを「恥じ入る」こともなく愛おしまんとする「時勢にまみれることのない澄んだ抒情」（金時鐘）があった。

奇しくも今年は尹東柱の生誕100年にあたることを新聞の記事で知った（『しんぶん赤旗』5月29日）。しかもいま、オリンピックとテロをだしにして、現代版の治安維持法と評される共謀罪法案が国会で強行採決されようとしている。きな臭さを増したこんな時に、彼の詩を読みながらその生涯を静かに思い起こしてみることはきわめて意義深いことであろう。そんなこんなで、魏さんに感謝したくなったこともあって、あえて書かずもがなの文章を付け加えてみた。

死ぬ日まで天を仰ぎ／一点の恥じ入ることもないことを、
葉あいにおきる風にさえ／私は思い煩った。
星を歌う心で／すべての絶え入るものをいとおしまねば
そして私に与えられた道を／歩いていかねば。

今夜も星が 風にかすれて泣いている。